

# 南島歌謡における身体とその変調に関する表現

大竹有子

## はじめに

形があり、手に取ることができる“もの”(物質)と、想念・信仰など形をもたないものは、有形か無形かという意味では対極にある。しかしまた、関連する部分は必ずあるものである。例えば、存在はするが手に取ることはできない信仰を体現する祭祀には、形を持つ祭祀道具がなにかしら使われるものである。人間に関してみると、肉体は有形の存在であるが、想念や動作といったものは、目に見えるものではあるが形をとどめることがない。

本稿でとりあげるのは、南島歌謡における「病氣」、さらに身体とその変調一般についての表現である。「病氣」そのものは、手にとることができる形はない。発熱時の体温の高さを体感したり、症状としての腫れ物や出血などに触れることはある。ただし、それがひきおこす不快感のような不調は、想念や動作などと同じく形をとどめない。有形たる身体と、無形の「病氣・不調」は、おのおの歌謡においてはどのように表現されるのだろうか、考えてみたい。

「病氣」という語からは、医学の診断による症状を想起しがちで、しかも今日の西洋医学の印象が強い。しかし南島歌謡の表現者たちが扱ったのは、中国医学や民間の療法である。そもそも、「病氣」についての考え方や医療については、古今東西さまざまな体系があることは医療人類学の成果が教えてくれる。南島歌謡の世界における「病氣」やその対処法には、どのようなものがあるのだろうか。また、歌謡の表現者たちは、どのように表現しているのだろうか。

本稿では「病氣」という語感とは異なる症状も対象としたい。例えば、魚の骨が喉につかえる、心労からの疲労、吹き出物、といった例は、いずれも「病氣」というには軽すぎる症状である。妊娠は身体の不調をきたすことがあるが、病氣ではない。また、現代の病名とは合致しない、あるいは不明な症状の描写もある。例えば信仰が理由の不調、いわゆる巫病は、西洋医学では異なる説明がなされる。そこでこれら一切、いわゆる「病氣」に関わることがらを広く俯瞰するため、本

稿では基本的に「(身体の)変調」の語を用い、「病氣」も適宜用いる。

本稿で対象とする、歌謡のなかの表現を、以下の5点に大別して考察する。

- ①身体全体あるいは部分を表現する語彙、言い換えなどによる表現
- ②一般的な意味での病氣の表現
- ③今日の言語感覚からいって「病氣」ではないが、身体の変調に関する表現  
(例：疲労、妊娠)
- ④信仰上の理由による、肉体的あるいは精神的な変調
- ⑤病氣治療を目的とした歌謡

①では変調の表現以前の、身体そのものについての表現を確認する。②以下が具体的な「変調」の内容である。④は、②や③とは身体に不調を来すという事実において共通していても、表現者たちにとっては全く異なる意味を持つ。⑤は、①および②から④までの用例とは性格を異にする。①から④までは、身体そのものに注目がおかれるが、⑤では身体の不調(病氣)が明確に認識され、なおかつその状態をコントロールしようという意志が表現されるからである。ほかに「死に関する表現」も「身体の変調」というテーマに密接に関連するが、信仰や世界観念など精神的な面とも重なる分野であり、一線を画す必要もあるため参考にとどめる。病氣や、望ましい身体の状態についての考え方は、時代・地域・文化などによって大きく異なるものだが、古謡の歌い手たちの観念を浮き彫りにしたい。また表現される側に関しては、動物も身体に不調を来すことはあるが、本論では基本的に人間に関する表現を対象とする<sup>1</sup>。

## 1. 身体のあるべき姿 - 身体そのものと「健康」の描写

「病氣」(不調)は原則として身体に起こるものであるから、その場合、不調を来す身体そのものに関する表現は、不調に関する表現と不可分である。また「病氣」と対極をなす「健康」は、不調をきたす以前の段階であるとともに、身体が本来あるべき状態、あるいは望ましい姿を表現する。ここでは祈願における表現をとおして、望ましい身体の内容を確認し、同時に、「はじめに」で提示したところの「①身体全体あるいは部分を表現する語彙、言い換えなどによる表現」について、身体を表す語彙にはどのようなものがあるのか確認したい。

1 (1).「健康」の表現① 身体全体を代表する部位

1 (1) a.「健康」という概念を用いた表現

健康は古今東西の人類共通する願望のひとつである。当然、南島歌謡においても祈願の中には健康についての表現がみられる。

うぬ家内元をや	この家内元には
ぬーぬ不足ん あらしみそーらんぐとう	
	何の不足もありませんように
くら家ーん とうん建ていたる	美しい家も建てた
子孫	子孫
健康御助きみそーち	健康を御助けなさって
ちゃーうっさ	いつも嬉しさ
福んとうらち	福も取らせて
うたびみそーり	ください

〔沖縄(上)・オタカベ171 16~24〕

上は沖縄北部の家屋新築の祝詞『茅花抜きの御願』である。ここでは健康の概念を表すのに「健康」という語そのものを用いている。具体的な状況の描写ではなく、概念そのものを用いる用例である。漢語(沖縄方言にとっての外来語)である「健康」を用いる表現は、比較的新しいかもしれないが、他に「どうづさけんこう(身体強く 健康)」〔八重山・ニガイフチ9 1〕という用例があり、上の用例のみが特殊というわけではない。ただし、多くの用例では、健康の描写はより具体的である。

1 (1) b. 身体全体を意味する身体部位の用例

「健康」という概念そのものを表す語彙を用いない場合は、身体の語彙を用いて表現される。

何相人や 今日からや	何相の人は 今日からは
こしちゅうくちゅうらしへいなー	腰強く強くさせへイナー
むーといくまでの御願	百年行くまでの御願
百歳いくまでの御願	百歳行くまでの御願
みーひち	目引き 病気
はなひちの	鼻引き 病気 の

なーびらん如に

世いちまで

いーじゃ<sup>かねくじま</sup>み金くじまの如く

常栄がふしめうたびみそーれ

ないように

世のいつまでも

いーじゃみ金くじまのように

常栄えの果報をさせていただきます

〔沖繩(上)・オタカベ138 15～23〕

上の用例は伊平屋島の「健康祈願の際に火の神にのべるのだから」からの引用である。引用部分は、祈願するところの「健康」、さらに生きていく上で理想的な状態を具体的に述べている。すなわち下線部分によると、望ましい状態とは、祈願者が「腰強く」あって、「目引き／鼻引き」(病気)をせず、「金くじま」のように百歳になるくらいまで長生きし、繁栄する、ということである。

最後から2行目の「金くじま」は、「石くじま」と対語になる場合も多いが、長寿の象徴として願詞によく登場する。『沖繩古語大辞典』(以下『沖古』)では未詳語とあるが、『南島歌謡大成』(以下『大成』)奄美篇には貝の一種で、魂寄せに必須の二枚貝とある〔奄美・オモリ・クチ・タハブエ 以下「オモリ～」と略記 18 注1、71 注2〕。「石／金」は堅固の意の美称であるので、沖繩の健康・長寿の祈願では、丈夫な身体を意味するのであろう。健康体で長寿を得るといふ、理想の状態の表現である。

上の用例2行目にみえる「腰強く」は、前後の文脈からすると、腰だけが丈夫という意味ではなく、全身の健やかさを意味していると解釈するのが自然であろう。すなわち、「病気をしない」「繁栄する」「長寿」という祈願のモチーフと並ぶのは、腰という身体の一部の好調ではなく、身体全体の健やかさである。ここでは「腰」が身体全体を意味し、身体の頑健を表現しているのである。

沖繩の勝連村津堅の「元旦の祝詞」には、「あしづーく(足強く)／ちまづーく(蹄 足 強く)／どうづーく(胴強く)／みーづーく(身強く)／みーまんぢみそーち(見守りなさって)」〔沖繩(上)・オタカベ165 24～28〕という用例がみられる。後注によると、この祝詞は津堅ノ口によって唱えられるオタカベで、題名どおり、元旦にあたって神前に線香・神酒を供え、来る年の豊作・豊漁・村落の繁栄を祈願する内容である。引用部分は、村落の人民の健康を祈願するくだりである。健康については「足強く／蹄強く」、「胴強く／身強く」と表現されている。

沖縄方言では「どう(胴)」には、身体としての胴体の意味以外に、身体全体あるいは自分自身という意味もある。右の用例のように身体の意味で用いる用例は、八重山の「どうはだ / みはだ (胴 = 体 肌 / 身肌) [八重山・ニガイフチイ108] の用例のほか、南島全域で一般的にみられる表現である。

奄美の「家の完成祝い」の祝詞には、結びとして「みなげえ きもなげえ (身長く 肝長く) / とうらしんそれい (あらせてください) [奄美・オモリ ~ 92 33・34] という表現がみられる。この箇所は祝詞の最後で、落成した家の住人の息災を祈願する部分である。祈願の次第を述べ、神の名を列挙したのちに引用部分で祝詞を結んでいる。引用部分の前には「申し足りない部分があってもお許しください」という意味の詞章が入っており、願意を確実に神に伝達し、最後2行の内容を実現させようという意図が感じられる。

その切実な祈願の内容は「身長く / 肝長く」あるように、である。「きも」は食物などとしての動物の肝臓のことを指すこともあるが、一般には心・精神・なさけなどの意味で用いられる(『沖古』、『沖縄語辞典』以下『沖語』)。歌謡でも「きも(肝)」は、「肝誇り / あよ誇り」[沖縄(上)・クエーナ3 37・38ほか]のように、心・精神などの意で用いられる場合が多い。ここでは「きも(肝)」が「み(身)」つまり身体の対語としての心の意味で用いられているが、「身 / 肝」の対語を用いて「心身」の意を表し、「長く」という形容詞を付して「心身共に健やかで暮らせるように」という祈願を表している。

1 (1) c. 「健康」の比喩と家庭円満の描写

たんとう くぶとぬようし

炭と昆布のように

どうがんじゅうさ みがんじゅうさ

体が丈夫で 身が 丈夫で

あらし給うりていり

あらせてくださいと

百二十御年なから 迎いしみていり

百二十歳は年の半ばと 迎えさせて

家人中や 玉笑い 根笑いぬ

家人数は 玉笑い 根笑いをする

正月ぬ嘉例 あらし給うり

正月の嘉例をあらせてください

[八重山・ニガイフチイ105]

上の用例は竹富島の元旦の願詞であるが、比喩表現に「炭と昆布のように」と

いう直喩を用いる点がめずらしい。もっとも、正月には炭と昆布を飾ることは沖縄の習慣でもあり、次の琉歌にもみえる。

あらたまの年に炭とこぶかざて 心から姿若くなゆさ

〔沖縄(下)・琉歌全集4〕

「炭(たん)」は「たんと=たくさん」、「昆布(こぶ)」は日本でも言われるように「喜ぶ」の掛詞であり、新年のめでたさとともに、来る年への予祝の意味ももつ(『沖語』410ページ「たん(炭)」項)。引用のニガイフチでも、同様の意味で用いられている。

ニガイフチの用例では「どうがんじゅうさ/みがんじゅうさ(胴頑丈さ/身頑丈さ)」という表現を用いている。健康を表す場合に「強さ」ではなく「頑丈」とする表現は、沖縄方言では今日でも用いられるが、『大成』収載の歌謡では他にはみられない用例である。

このニガイフチでは、「玉笑い/根笑い」という表現が、身体の健康を含む理想の状態を象徴している。ここでは「玉」は「(珠玉のように)価値ある、立派な」の意味、「根」は「ものごとの本源の部分、中心」の意味の美称辞である。また「笑ひ」とは「喜びの心情を表情や声によって表す」こと(『沖古』参照)である。つまり、家族が心から幸せだと実感し、それをいとおしく大切だと互いに認識できる状態、と解釈することができる。長寿・健康が幸福な人生の象徴であることが、「玉笑い/根笑い」という対語からうかがわれる。

1 (2) 「健康」の表現② 身体を代表する「足/つめ」

1 (2) a. 健康を意味する「あし強く/つま強く」の用例

前項(「健康」の表現①)においては、「健康」の表現として、「腰強く」・「胴強く/身強く」・「身長く/肝長く」などのように、身体の一部を意味する語彙に「強い」などの形容詞を付した表現が頻繁にみられることを、用例から確認した。この常套表現で用いられる身体の一部として、よくみられるのが「足」に関する表現である。

作り物をもふがやうに  
御守りめしよわちへ  
たべめしやうれ  
諸万人

作り物を思うように  
御守りなさって  
下さい  
諸万人を

あしぢよく

つま ぢよ く あらちへ

たべめしやうれ

足強く

爪強くあらせて

ください

〔沖繩(上)・オタカベ<sup>69</sup> 12～18〕

上の用例は『琉球國由来記』収載のオタカベの部分である。引用部分は、前3行が豊作祈願、後4行が健康祈願で対をなしている。農作物一般(「作り物」)の豊作に対して、健康祈願の部分が身体部位としての足のみの頑健さを祈願するということは考えにくく、「足/爪」のみで身体全体を指すと思われる。

「あし強く/つま強く」を含む用例は、「塩屋海神祭のオモイ 田港アジアゲにて歌ふもの」にもみられる。該当部分は「うまん人ぬ(御真人が〔御万人=民衆か 筆者〕)/あし強く(足強く)/つま強く(蹄強く)/わぬ神うがまって(我が神は拝まれて)/とはくさど(十百歳だよ)/やはくさど(八百歳だよ)」〔沖繩(上)・ウムイ<sup>194</sup> 16～21〕と表現されている。このオモイは、海神祭に来訪する神に向かって集落の理想的な様子を描写し、来る1年もかくあるようにという希望を表現している。ここでも、「うまん人」(集落の人々)が「足強く/蹄強く」あるように、という表現がみられる。引用は21節までであるが、22節以降は「鷲の鳥がニレーから甘種/白種を運んできて畦形にまきちらして、豊年になるように」という意味の詞章、すなわち豊作・豊年の祈願が続く。つまり「集落の人々の健康」と「作物の豊作」が、この「塩屋海神祭のオモイ」において祈願されているのであり、「あし(足)/つま(蹄)」とは、やはり脚部のみではなく身体全体を意味すると考えられる。

沖繩の大宜味村塩屋の「御願パーリー」のさいのオタカベには、「すにん(諸人〔万人〕に対し「千人」か 筆者)/まんにん(万人)/あしづーく(足強く)/ちまづーく(蹄強く)/うとういみそーり(お取りなさいませ)」〔沖繩(上)・オタカベ<sup>192</sup> 2～6〕とある。〔ウムイ<sup>194</sup>〕と同じく海神祭のさいのものであるが、ヌル(祝女)の行列に向かい、敬虔に拝むときの詞章である(補注、『大成』沖繩篇上631～632ページ)。この用例でも集落の人々の健康を祈願しているのであり、「足強く/つま強く」は身体を健康を意味していると解釈できる。

「足強く/つま強く」の用例として上に挙げた3例は、いずれも沖繩地域のものである。すくなくとも沖繩地域では、「足強く/つま強く」が、身体全体の健

康を意味する慣用的な表現といえよう。

1 (2) b. 「健康」以外の表現における「あし/つめ」の用例  
ここで「足」を用いた表現で、「健康」以外を意味する用例を確認しておこう。

あーどろシ かぎどろシぬ	良い年美しい年の
とろシぬなぎ ばだぬなぎんな	年中季節中に
<u>あしぬき ぴさぬきイ</u>	<u>足の怪我足の事故が</u>
にゃーさまだーリ	ございませぬように
とーんチ まのんチからー	遠い道真野道から
んみゃーくま キむくまー	胸の思いを込め心をこめて
あらさまいり	(歩行安全を) あらしますように

〔宮古・ニガリ7〕

上は宮古の『大世鎮めのニガリ 個人の願い』である。神を讚美し、富貴や豊作や家庭の円満を祈願する内容であるが、引用部分は健康祈願の一部で、避けるべき不調の状態として「あしぬき/ぴさぬき」があげられている。「遠道 真野道」の語や、「歩行安全」という補訳からは、この「あし/ぴさ」は身体の部分としての「足」のみを指すという解釈もできる。一方で、引用部分の周囲の文脈は富貴や豊作、家庭の円満という願意が並んでおり、この部分全体を健康祈願とすると、足についてだけというよりは、身体全体の健康を祈願していると考えた方が自然であろう。

ているていだが	照る太陽の
いちぬてい さされいてい	一の手を指されて
ななぬてい さされいてい	七の手を指されて
おもいぬまづかねや	思いのまづかねは
<u>あしだるさ とうてい</u>	<u>足だるくなって 懐妊して</u>
<u>つまだるさ とうてい</u>	<u>爪だるくなったので</u>

〔奄美・オモリ52 7~12〕

上の用例は、奄美のユタの起源を語る「思松金」の一部で、有名な日光感精のくだりであるが、日光に感精した思松金の体調を「足だるさ/爪だるさ」と表現している。ここでも、足だけというよりは身体全体を意味していると思われ、「だるさ」という表現で、つわりの様子を率直に表しているようである。

宮古と奄美の用例を挙げてみたように、沖縄の「足強く/つま強く」という健康の表現ほど明確ではないが、脚部を意味する語彙によって身体全体をさし、健康状態を表現する用例は、沖縄以外の地域にも存在する。よって、健康状態や身体の不調を表現するとき、脚部を指す語彙によって身体全体を表す用例が多い、という表現の傾向を指摘することができる。

脚部は身体を起立させ、日々の生業を行う上で重要な部位である。脚部あるいは腰の状態が悪くなれば、寝たきりになるなど身体に重大な影響があらわれる。それを忌避する感情が、脚部に注目した表現となってあらわれていると推測される。

1 (3)。「長寿」の表現 - 「健康」の結果として

祭祀のさい、健康と並んで祈願されるのが「長寿」である。健康な人生を長く送った結果が長寿となると考えれば、両者が並列するのは自然な発想といえよう。長寿の表現は、例えば1 (1) cで引用した竹富島の元旦の願詞〔八重山・ニガイフチ105〕に「百二十歳は年の半ばと 迎えさせて」とあるように、具体的な数字で年齢を提示する場合と、「綾差羽が生える」、「金/石杖を突く」、先に引用した〔沖縄・オタカベ138〕の「石くじま」などのように、慣用的なめでたい表現を用いる場合がある。

あやじやばに

もゆるからん

かねぐさに

つくまでん

わがかみや

みがわる

綾差羽が

生えるまで

金御杖を

突くまでも

我が神は

生え変わる

〔沖縄(上)・ウムイ105 106～111〕

上の用例は、長寿を表す慣用的な表現「綾差羽」・「金御杖」の語を用いている。「羽が生える」という表現は、八重山の「赤馬節」などにもみられるが、生まれ変わったように嬉しい気持ちという意味に繋がる。

慣用表現である対句を、いくつも並べる場合もある。

あやざばに

しるざばに

綾差羽が

白差羽が

みいかるーか

萌え変わるまで

いしくじま

石くじま

かにくじま

金くじま

ういかるーか

生え変わるまで

いしぐさに

石御杖を

かにくさに

金御杖を

ちききろか

突き切るまで

ぬききろか

貫き切るまで

〔沖縄(上)・ウムイ380 10～28〕

上は「新しく神になった人へのオモロ」である。ここでは神に向かったのオモロであるから、長寿祈願というよりは「未永く」という言祝ぎの表現であろうが、「長い歲月」を意味するという点においては長寿の表現と共通するといえよう。

遊離した魂を本来の身体に戻す儀礼における奄美の呪言「魂つけのタブエ」の末尾では、「いしくじま(石くじま 貝の名) / かねくじま なるまで(金くじま 貝の名 になるまで) / はちじゅう はっさい(八十八歳) / きゅうじゅう きゅうさい(九十九歳まで) / わが いぬち おせろ(私が命をあげましょう)」〔奄美・オモリ～165 53～57〕という表現を用いて、身体に戻した魂がしっかり安定し、祈願者が長寿を全うし、長寿を得るようにと祈願している。ここでは「石くじま / 金くじま」という常套句が用いられている。「石くじま」は、前述のように、魂寄せに必須のひざら貝科の二枚貝とある〔オモリ・クチ・タハブエ 18 注1、71 注2〕。引用の下線部分は、儀式に用いる貝のように強健で長寿を得るようにという願意である。長寿は「八十八歳 / 九十九歳」という数字の対語としても表されている。

ふんにんはじみ、ふぁ、まー、  
やーにんじゆ、きないにんじゆ、  
どーづーさ、きんこー すくさい、

本人をはじめ 子孫  
家人数 家庭人数

いしぬつーさ、かにぬつーさ、

身体が 強く 健康 息災で  
石の強さ 金の強さで

(略)

うやき、はんじょー

富裕繁盛

むむさかり、さからし、たぼーりり、

百栄えに栄えさせてくださり

〔八重山・ニガイフチィ<sup>34</sup>〕

上のニガイフチィには「(石/金)くじま」,「(石/金)ぐさに」のような常套句はみられないが、福祿寿の祈願とともに「石の強さ/金の強さ」という対語がみられる。「石/金」は堅固なものを意味する常套的な美称辞であるが、引用部分では健康を意味する表現として用いられている点は、「くじま」「ぐさに」などが付随する用例と同根の表現といえよう。

命果報願ようらば

九十九ぬ 願い

身ぬ将来 願は

百二十歳ぬ御願い

命果報 長寿 を願いなさったなら

九十九歳の願い

身の将来を願ったなら

百二十歳の御願い

〔八重山・アヨー14 4・5〕

上は、長寿を象徴する年齢を提示する用例である。提示される年齢は歌謡によってまちまちであるが、実際の目安などではなく、長寿の比喩としての誇張表現である。

抄括

ここまでみてきた用例から、南島歌謡における健康に関する表現は、「健康な状態」を描写する場合と、健康に過ごした結果としての「長寿」を強調する場合がある、という点をまず確認したい。身体が望ましい結果にあるとき、つまり健康を表現する場合の特徴は、「どうづーく(胴強く)/みーづーく(身強く)」、「足強く/つま強く」のように、胴・身・足・腰といった身体全体を意味する語彙に「果報」「強く」「長く」「頑丈」などの、健康であることを表現する形容詞を付加する用例が多い。中でも「強く」は頻繁に用いられている。身体全体を意味する語彙は、「どう(胴)」・「み(身)」のような文字通りの語彙の場合もあるが、「腰」,「足/爪(蹄)」のように、本来は身体の一部を指す名称であることが多いことは特徴的である。

「長寿」は、「石ぐさに/金ぐさに」,「石くじま/金くじま」,「綾差羽/白差羽」という常套句によって表現される場合と、「百二十歳/百三十歳」,「十百歳/八百歳」のように数字による年齢を提示することで表現される場合がある。「健康」

と「長寿」は別々のものではなく、むしろ同じ歌謡に同時に含まれる場合が非常に多い。また、例えば「石くじま／金くじま、十百歳／八百歳」といったように、常套句の対句を複数並べる用例も多い。

南島歌謡における「健康」とは、身体が強健な状態であるというシンプルな表現がなされている。文中で「炭と昆布」の直喩の用例を引いたが、このような比喩はあまり用いられず、望ましい状況を具体的かつ簡潔に述べる場合が多い。また「長寿」は「健康」の結果として実現されるものである。実際には、「健康」と「長寿」とをふたつながら得ることは難しかったであろうが、それゆえか、簡潔ではあるが美称的な表現が用いられる。「健康」も「長寿」も、熱心に祈願する対象であり、悪いイメージでの表現例はみられない。

この節で引用した用例は、「思松金」以外は、いずれも一般の民衆の健康を祈願しており、多くが祈願の詞章である。叙事的な歌謡の描写や、病氣治療の呪言（後述）とは異なり、これらの用例は理想的な状態を率直に言語化している。「身体に不調を来さない」「長生きする」という事項が繰り返し強調されていることは、往時にはそれが難しく、文字通り「有り難い」ことであったという背景をも物語っている。

## 2．身体の不調の諸相

前節では、南島歌謡において、健康とその結果もたらされる長寿は、祈願の結果として実現されるべき一つの理想であることをみてきた。健康と長寿については頻繁に表現される結果、一定の形式や常套句がみられることも、その証左といえよう。では、その反対のベクトルである、身体に不調を来した状態、いわゆる「病氣」は、どのように表現されるのだろうか。

歌謡に登場する「病氣」は、基本的に表現者が把握できる症状ということになるので、怪我やできものなど外見で分かるものや、外科的な症状、自覚症状が明確な病氣ということになる。ここでは、「はじめに」でまとめたところの「②一般的な意味での病氣について表現された表現」について確認する。

最も一般的な意味での「病氣」の表現には、「病氣」というように単語を用いる場合と、症状を描写する場合がある。先にみてきた身体の望ましい状況が、どのように崩れていくのかをみていく。

病氣一般をさす語彙について、王府時代の共通語である首里語の表現を確認するため、『沖語』の索引篇で「病氣」を引くと、「やまい(病)」・「びょうき(病氣)」・「やみ(病み)」・「さわり(障り)」に該当する語彙が、それぞれ挙げられている。歌謡の表現をみても、おおむねこれらと乖離はない。歌謡の用例からは、「びょう(病)」・「びょうき(病氣)」、「かぜ(風)」、「やふ(厄)」が主な用例としてあげられる。

2 (1) .「びょう(病)」

しじゅうはち ていぎぬ	四十八の骨の
ふねいまちげどう あん	骨まちがいであって
<u>びょうや</u> あらん	<u>病氣</u> ではない

〔奄美・クチ130 24～26〕

上は奄美の「かざほ」のタブエである。この用例にみえる「びょう」は、現代の「病氣」とほぼ同様の語感で、特定の症状というよりは病氣一般を指すと思われる。ただし「骨まちがい」が具体的にどのような症状を指すのか不明であり、「ていぎ」の語義も未詳である。「骨まちがい」であって「びょう(病氣一般)」ではない、と最後に言明しているので、「骨まちがい」のほうが軽い症状をさすのであろう。

「しじゅうはち ていぎ」は「四十八の骨」と訳されている。「子ども祭り」〔奄美・オモリ～80〕の後注には「人体は72の骨からなっていると島 奄美大島 筆者 ではいつている」とある。波照間永吉「八重山のアンガマ問答覚書」<sup>2</sup>には、アンガマが観衆の質問に答えて、死後に四十九日忌を行うわけは、人間の骨が49本あり、1日1本ずつ後生に納めるからだとする解答がみられる(〔波照間：1999年〕805、809ページ)。波照間氏はこれを仏教の民間的解釈と考え、四十九日忌の供物である49個のプニムチ(骨餅)と同根と考えられている。「四九」という数字に関しては仏教の影響と考えられるが、人間の身体を骨の数で表すという発想そのものは奄美の表現に通じる。具体的な数字は別として、骨の数によって人体を意味する用例は、南島に広くみられるようである。

2 (2) .「やみ(病み)」

かみさま がなしゃー	神様
また うまばいし	また御見守り下さって

やみ ばなしき

しみらんがぬー

(略)

うみーまぶい したばーり

病氣や風邪ひきなど

させないように

御守りください

〔奄美・オモリ～83 8～16〕

上の用例からは不調の表現として「やみ(病み)」をあげることができる。並んであげられている「ばなしき」は「鼻引き」で風邪を指し、特定の症状を指す語であるが、ここでは「病み」と同格に並んでおり、この祝詞全体が神に人々の息災を祈願する内容であるので、「やみ」「はなひき」とも病氣一般に近い意味合いで用いられていると考えられる。まさしく「風邪」という訳と重なるが、現代の「感冒」(寒気による呼吸器系の炎症疾患の総称)に近い語感であろう。

2 (3)。「かぜ(風)」

あくかぜあろうか

かみかぜあろうか

四十九のほねにしんこだる

かぜあろうか

しまつきんごのかぜあろうか

悪風あろうか

神風あろうか

四十九の骨に染みこんだ

風病あろうか

始末禁固の風あろうか

〔奄美・クチ16 17～20〕

上の用例は、「かぜ(風)」つまり悪い気による症状を、民間巫者(ユタ)が治療するときの呪詞の一部である。『大成』奄美篇では「風邪クチ」と翻字されているが、ここで治療を試みている症状は、高熱などで寝込むような症状一般であろう。引用部分には「四十九の骨に染みこんだ」とある。骨の数で人間の身体を表現することについては「びょう(病)」の項で述べたが、ここでは身体の内部深くに病気が入り込んだというような意味と思われる。

2 (4)。「やく(厄)」

やむとぅうに うにぬ

ぶりゃーうに うにぬ

(略)

いんふさり やふぬ

シー ふさり やふぬ

大和船船が

群れ船船が

海腐れの病気の

潮腐れの病気の

んきなーいきうりばん  
ニーなぬーりうりばん

向かっていっているので  
乗りに乗っているのだからよ  
ってくる臭みを

(略)

かいしょーイ わんど  
むどうしょーイ わんど

追い返しているのは私だ  
追い返しているのは私だ

〔宮古・タービ<sup>13</sup> 40～45〕

上は「根の世勝りのタービ」の一節で、神である「根の世勝り」が数々の業績を披瀝する内容のひとつである。宮古に向かってくる大和の船を追い返している、というくだりであるが、その大和の船(の船員)が「海腐れ/潮腐れの病氣」にかかっているということのようだ。「やふ」は「病氣」と訳されているが、「厄」と直訳でき、「かぜ(風)」と同様、良くない気にあたった結果といった意味である。『大成』の訳には「ただよってくる臭み」という補訳が付されているので、くされた臭いとする症状のようだ。具体的な症状などは述べられていないが、船を經由して外部からやってくる悪い気というほどの意味であろう。

「厄」がすなわち「病氣」と同じであるかは議論の余地があるが、「海/潮による不調」という程度の意味で、いくらかは「病氣」の語感も含むのではないだろう。海のむこうから外部の船が運んでくるものは、交易品や珍奇な品物など良いものばかりというわけにはいかない。たとえば王府は伝染病である天然痘対策として、13年周期で痘苗を輸入していた。この場合、王府の意図とはいえ、天然痘も船で沖縄に渡来したのである<sup>3</sup>。

2 (5)。「めひき(目引き)/はなひき(鼻引き)」

なー かみがなしーまえー  
おたすけみしやうち  
めーひち  
はなひち  
おしのけみしやうち  
たびみしやえびり

もう 神加那志前  
御助けなさって  
目引き 病氣  
鼻引き 病氣 を  
押しのけなさって  
下さい

〔沖縄(上)・オタカベ<sup>124</sup> 14～19〕

上の用例には身体部位である「目/鼻」がみられるが、この場合は風邪を意味

する「目引き／鼻引き」という慣用的な表現の部分である。

大浜村、黒石村上から	大浜村 黒石村の上から
<u>ゆーとばなしき</u> ん清め	<u>疫病感冒</u> も袂い清め
獅子ぬ まいん やーしー	獅子の前 お獅子様 のように
胴強健さあらしめ	胴 体 を 頑丈であらせて
びーんさびん、あらしとらんぐとぅ	凶事も 錆もつかないように
物作りさばん	物作しても
万作 あらしめとーる 願いーゆー	

万作をあらせてくださいとお願い申し上げます

〔八重山・ニガイフチィ<sup>54</sup>〕

上は「獅子への願詞」の一部分である。対語「目引き」を伴わないが、下線部「ゆーとばなしき」の「ばなしき」は「鼻引き」である。健康祈願において、避けるべき不調の状態として表現されており、風邪・感冒と訳することができるが、病気一般という意味に近いと解釈できる。「鼻引き」という表現は、病気一般の意味で南島の広い地域で用いられているといえる。『沖縄古語大辞典』にも、首里・今帰仁・八重山の方言形が記載されている。

抄括

不調を描写する場合、「びょう」・「やみ」・「かぜ」・「やく」のように病気一般を指す語彙を用いる場合と、「めーひち／はなひち」「ゆーとばなしち」のように、「目」・「鼻」という身体の部分を意味する語彙を用いた複合語によって表現する場合がある。しかし健康の表現の場合と異なり、明確な形式はみられない。「びょうや あらん（病気ではない）」、「やみ ばなしき（病気や風邪ひきなど）／しみらんがねー（させないように）」といったように、歌謡においては回避したい状態として表現されるので、願詞や治療の呪詞以外で積極的に表現される例は多くはなく、表現も多彩とはいえない。願詞以外での「病気」については、病気治療を目的とした呪言があるが、こちらは治療の方法や過程を描いているため、4（1）で改めてみることにする。

### 3. いわゆる病気以外の身体の不調

はじめに述べたように、「身体の変調」と「病気」とは、まったく同じとはいえない。本節では、「事故・怪我」、「妊娠」、「疲労」の3つの項目に分けて、「病気」ではないが身体に不調を来す場合の表現（「はじめに」でまとめたところの③）を概観する。

#### 3 (1). 事故、怪我

事故・怪我が「病気」と共通する点は、「身体に不調・不快感を生じている状態にある」という点である。異なる点は、「病気」の原因・理由は、自らの身体内部から発しているが、事故・病気の原因は外部からくる、という点である。

事故や怪我についての表現は、治療の呪言に多くみられる。治療の呪言は、本来は南島全域に存在するものであろうが、『大成』では沖縄地域（沖縄篇上）の収載がない。奄美のタブエ・クチタブエと、八重山のジئمム又は呪言に該当するジャンルであり、とくに用例・種類が豊富に収載されているのは奄美篇である。宮古の場合は「池間島のマジナイゴト」一編のみで、内容は過食による腹痛の治療祈願である。

#### 3 (1) a. 事故

あーどうシ かぎどうシぬ	良い年美しい年の
とうシぬなぎ ばだぬなぎんな	年中季節中に
<u>あしぬき</u> <u>ピさぬきイ</u>	足の怪我足の事故が
にゃーさまだーリ	ございませぬように
とーんチ まのんチからー	遠い道真野道から
んみゃーくま キむくまー	胸の思いを込め心をこめて
あらさまいり	(歩行安全を)あらしめますように

〔宮古・ニガリ7〕

上は宮古の「大世鎮めのニガリ 個人の願い」である。「あし/ピさ」という対語については、1 (2)において、「健康」を表現する場合に身体の一部をさす語が身体全体を意味するという傾向の用例として引用した。ここでは「き(怪我)」の部分に注目したい。「あしぬき/ピさぬき」は、避けるべき不調の状態としてあげられている。1. でみたように、健康祈願の場合は「強く」「清らさ」「丈夫」など、理想の状態の表現が用いられることが多いが、この用例は不

調が描写される珍しい例である。骨折か捻挫かといった症状は不明であるが、発熱や吐き気といった身体内部からの理由による不調、いわゆる「病気」とは別に、外科的な「怪我」一般の用例としてあげることができる。

呪言が対象とする事態のうち、事故といえるものでは魚の骨が喉にささったときの「ニギグチ」〔奄美・オモリ～107から122など〕、目にゴミが入ったときの呪詞〔奄美・オモリ～101〕、百足や蜂に刺されたときやハブに噛まれたときのタブエ〔奄美・オモリ～154・155など〕があげられる。

<u>にぎば ぬでい</u>	<u>魚の骨を飲んで</u>
<u>さねば ぬでい</u>	<u>小骨を飲んでしまつて</u>
あらばなぬ しかま	折目祭の朝に
あらばな たたらじ	折目祭に立てずに(困っている)
うんどりぬ くちどお	海鳥のようにのど太い口だよ
あとおぬ くちどお	あとう 鳥名 のようにのど太い口だよ

〔奄美・オモリ～112 5～10〕

上は「ニギグチ」の一例である。ニギグチは、骨がささっているところの喉を鳥(引用では海鳥であるが多くは鶺鴒)の広く通りのいい喉に例え、その広い喉を通して体外に排出するようにと唱える内容である。引用の部分では、骨を飲んだせいで祭祀に出られないという困惑した状況を言い添え、鳥の喉にあやかろうという類感呪術的な表現が展開されている。「ニギグチ」と同様の呪詞としては、ここでは引用しないが八重山のジئمヌにも「魚の呪文」〔八重山、ジئمヌ又32〕がある。

うまりぬ	生まれの
からだに むちゃりる	体にある
<u>あばれひすべーま</u>	<u>清らかなイボよ</u>
からだはら 身はら	体から 身から
ゆりよ ゆりよ	離れよ 離れよ
(略)	〔八重山・ジئمヌ又39〕
<u>しる目 かい目ぬ みちうぬ</u>	<u>白い目 美しい目の目のゴミは</u>
んじはり んじはり	出ていけ 出ていけ

〔八重山・ジئمヌ又43〕

上は2例とも八重山のジئمヌであるが、〔39〕はイボ、〔43〕は目のゴミを除去する呪文である。2例とも「離れよ」「出ていけ」という明快な表現を用いて、実現されるべき状態を表現している。この2例の特徴は、下線部のように讃辞を用いて解決しようとしている点である。目にゴミが入ったときのジئمヌは「かい目(美しい目)」と、被害を被った目そのものを褒めることで快復する力を高めようとしている。イボを除去する呪文については、除去すべき災いであるイボを「あばれ」(あわれ、清らかな)と表現しており、災害に美辞麗句を与えて退去を願う、まつりあげに通じる発想がみられる。この発想が最も顕著に表れる歌謡は疱瘡歌(後述)であるが、疱瘡歌以外にもまつりあげによって不調をなおそうとする発想がみられることを指摘することができる。

3 (1) b. 怪我

怪我の用例としては、血止め〔奄美・オモリ～156など〕、やきじょ(やけど)の呪詞〔奄美・オモリ～148など〕などがある。「事故」に関する呪言は多いが、厳密に「怪我」に分類できるものは多くない。

<u>さまがやききじや</u>	かねはる様が焼き傷は
<u>さもしちたぼれ</u>	<u>さまして(直して)下さい</u>
じゅうさん びる	十三尋
さんじゅうさん びる	三十三尋
となえ あげもうそう	唱えあげます

〔奄美・オモリ～146 5～9〕

右は奄美の「よごしやきグチ」である。症状などは詳しく描写されていないが、下線部の「やきじや/さもしちたぼれ(焼き傷は/さまして下さい)」の部分から、火傷であることがわかる。

ふかさきちな かたな	深く切ったか刀
あささきちな かたな	浅く切ったか刀
ちちとう ははとうが	父と母とが
<u>ちのむち とうむいてい たぼれい</u>	<u>血の道を止めてください</u>

〔奄美・オモリ～156 9～12〕

もとんちは	もとの血は
-------	-------

もとえかえせ

元に返せ

もとんかえせ

元に返せ

もとんかえせ

元に返せ

【奄美・オモリ～157 1～4】

上の2例は、ともに「血止めのタブエ」である。「血(の道)を止める」、「血をもとに返す」など、血液の流出を防ぐための詞章がならぶ。ここでは「怪我」と「事故」に分けたが、呪言の治療対象は、発熱や下痢などの「病気」に関するもの他に、放屁した人を特定するなどさまざまである。呪言の対象となる状態自体は、「病気」や「事故」などに制約されないのである。呪言の表現はさまざまであるが、「よごしやきグチ」のように、解決しようとする症状が詞章だけでは分かりにくいものでも、「元に返せ」「直してください」と、願意は簡潔に表されている。

### 3 (2). 妊娠・出産

病気ではないが身体に不調を来す用例として、妊娠と疲労の用例をみてみたい。妊娠に関する表現は、叙事的な歌謡においてしばしばみられる。

#### 3 (2) a. 妊娠・出産の描写

ているていだが

照る太陽の

いちぬてい さされいてい

一の手を指されて

ななぬてい さされいてい

七の手を指されて

おもいぬまずかねや

思いのまずかねは

あしだるさ とうてい

足だるくなって 懐妊して

つまだるさ とうてい

爪だるくなったので

【奄美・オモリ～52 7～12】

上の用例は、奄美のユタの起源を語る「思松金」の一部で、有名な日光感精のくだりである。1 (2)でみたように、「足/爪」のように身体の一部を指す語彙によって身体全体を意味するという表現の傾向は南島全体にみられるので、上の用例も、足に限定せず身体全体を意味していると思われる。「だるく」という表現は、妊娠中のつわりの様子を率直に表しているようである。とくに注意すべき用例が他にない限り、妊娠に伴う身体全体の不調を意味するという解釈ははずれてはいないであろう。ただし、後述の「疲労」に関連するが、祭祀歌謡

において「疲れた」という表現がみられることから考えて、単なる妊娠に伴う不調ではなく、神に関わるがゆえの聖なる疲労とでもいうべき側面をもつとも考えられる。

次の用例は、通常の妊娠の様子である。

<u>んみや ばらみ</u>	もう（連れてきた女は） <u>孕み</u>
<u>まいしゃがり トノまら</u>	<u>お尻が下がって 殿よ どうしよう</u>
<u>オロシシてョー</u>	<u>墮ろし捨てようか</u>
<u>やっヴいシてょー トノまら</u>	<u>流産しようか 殿よ</u>
（略）	
<u>うるしゅーばら</u>	<u>墮ろし腹を</u>
<u>やっヴゅーばら シていいな</u>	<u>病み腹（をして）捨てるな</u>

〔宮古・フサ3 66～69〕

上の用例は、宮古の「磯殿のフサ」において、若い妾が妊娠した様子である。「まいしゃがり（お尻が下がる）」と、体型を描写することで妊娠を表現している。流産（墮胎）についても触れられ、「うるしゅーばら（墮ろし腹）／やっヴゅーばら（病み腹）」などの、墮胎に伴う身体の不調を表す語がみえる。妊娠の喜びがない否定的な表現である。この用例では「まい（尻）」や「はら（腹）」など、妊娠に直接関わる身体部位が表現されている。

竹富島の「腹嘉例の願い」は、安産を祈願する内容である。

<u>腹中 腹中 守りおーる 生らしん神</u>	<u>お腹中 腹中を守っておられる 生まれの神</u>
<u>手撫でい 小撫で 守りおーる 育ていん神</u>	<u>手撫で 小撫でてして守っておられる 育ての神</u>
<u>腕勝 手勝ぬ 勝る神（略）</u>	<u>腕勝り 手勝りの勝る神の（略）</u>
<u>玉ぬ女頭ぬ 腹中 腹中ぬ 玉ぬ子 黄金子や</u>	<u>玉の女頭の腹中 腹中の 玉の子黄金の子は</u>
<u>物障い 事障い 無事に</u>	<u>物障り 事障りがないように</u>
（略）	〔八重山・ニガイフチ114〕

現在でも妊娠を「お腹が大きくなる」と表現することがあるが、このニガイフチでも「腹中」という語が繰り返されており、「磯殿のフサ」にもあったよう

に、妊娠に関わる身体部位として注目されていることがわかる。また懐妊を守護する神に対しては、「手撫で」「腕勝り/手勝り」という、手に関する表現が多いことが注目される。オモ口の「掻い撫で」と同様、守護を表しているのであろう。同じ妊娠に関する表現であっても、否定的な「磯殿のフサ」の表現と比べ、懐妊の幸せと安産への願いが感じられる内容である。

妊娠期間の終わりには、当然ながら出産が控えている。

<u>あかち</u> だりなぎな	<u>赤血</u> を垂らしながら
<u>ふゆち</u> だりなぎな	<u>古血</u> を垂らしながら

〔宮古・タービ17 9〕

上は宮古の「ザウンガニのタービ」の一節である。歌謡の表現は断片的で、内容が分かりにくい。巻末の注によると、引用部分は出産の描写である（『大成』宮古篇453ページ）。同様の表現は「大婆うぶばのフサ」〔宮古・フサ20 10〕にもみられる。この二例の「赤血/古血」は、死を伴う出産の表現として用いられている。詞章中の「赤血/古血を垂らす」という表現が、断片的な内容ながらも出産の様子を生々しく表現している。

### 3 (2) b. 「血」と妊娠

実は「赤血/古血」あるいは「赤血/黒血」という表現は、出産以外の場合も用いられる常套句である。

<u>あかち</u> は むぐらち	<u>赤血</u> は廻らして
<u>しゃち</u> は むぐらち	<u>シャ血</u> は廻らして
あしなてい	汗になって
みじなてい	水になって
じょっとー さぎり	充分だ 下がれ 熱を下げよ

〔奄美・オモリ～302 29～35〕

上の用例は奄美の「人まじによい」であるが、引用部分は発熱を引かせる呪言となっている。ここでは「赤血/シャ血」は、血行がよくなるようにといった意味で用いられている。

<u>あかちぬ</u> むるもい	<u>赤血</u> の丸まい
<u>あかちぬ</u> もとうに	赤血のもとに
ちりりよ	散れよ

くろちぬ むるもい  
くろちん ちりりよ

黒血の丸まい  
黒血のもとに散れよ

〔奄美、オモリ～314 1～5〕

上も奄美の用例であるが、「ニプトウ 腫物 の呪文」の一部である。ここでは「赤血の丸まい／黒血の丸まい」は、腫れ物を意味している。

「赤血／黒血」の対語は、さらにいえば人間ではない動物に対しても用いられる表現である。

まくぼよォん  
ほこちたらち  
たまんよォん  
あかちたらち

マクボ魚も  
黒血を垂らして  
タマン魚も  
赤血を垂らして

〔沖縄(上)・ウムイ131 12～16〕

しちぬいゆーむ  
たまぬいゆーむ  
あかちたらだら  
くろちぶこぶこ

シチの魚も  
タマの魚も  
赤血ダラダラ  
黒血ブクブク

〔奄美・オモリ296 144～118〕

上の2例は、地域は異なるが、引用部分からも分かるように魚についての表現である。沖縄の場合は祭祀（注には「ウンナイウルミ」とある）の時にノロがうたうウムイ（同様の表現が〔ウムイ313 13～16〕にみえる）、奄美の用例は民間巫者（ユタ）が海難者の鎮魂のさいに唱える呪詞「シバナシンゴ」にみられる表現<sup>4</sup>と、歌謡そのものの性質は異なる。ただし歌謡のストーリーにおいては、沖縄の例は人間の漁師が船を出して魚を獲る場面、奄美の用例は鷹が魚を獲って喰らう場面である。2例とも、獲物として捕獲されるとき魚の様子を描写しているという点においては、共通する表現である。

しばたまい  
ふてじしや  
（略）  
ぬきころし  
さしころし

舌の反った  
太肉 猪 を  
  
貫き殺し  
刺し殺し

あかちたらし

くろちたらし

赤血を垂らし

黒血を垂らし

〔沖縄(上)・ウムイ236 13～20〕

上は沖縄本島北部において、村落の祭祀(地域によってウンジャミ・ウフウイミなどと呼ばれる来訪神儀礼)でノロが唱えるウムイである。猪を捕獲する様子を表現し、豊年を予祝する。猪が狩猟の獲物となる場面を表現しており、先にあげた魚についての表現と共通する。

こうして用例を並べてみると、血に関する用例は厳密には病気とは異なるが、死産を伴う出産、狩猟・漁労のさいに標的の動物が獲物となって絶命する場面など、いずれも苦痛を伴う身体のあるさまを描写するとき用いられることが分かる。「赤血/黒血(シャ血)」という色を伴う表現は、出血の生々しさや、血を流す者の苦痛、断末魔をも表現しているのである。「血」は苦痛を想起させるものとして、どちらかといえばマイナスイメージを伴って、南島全域で用いられている。「出産」の項目としてあげた宮古の「ザウンガニのタービ」の用例は、出血を伴う身体の変調を表現する用例のひとつといえよう。

妊娠は悪阻などで体調が悪くなる場合が多く、次の段階である出産とともに、時には生命に関わる場合もある「身体の変調」である。たしかに「病気」・「怪我」・「事故」とは性格が異なる変調であり、歌謡での表現の用例数も多くはない。妊娠についての表現は、「病気」・「怪我」とは異なり、宮古の「磯殿のフサ」のように腹部に注目したり、八重山のニガイフチのように養生を祈願したりと、一般的な「病気」・「怪我」とは異なる表現もある。一方で、宮古の「ザウンガニのタービ」では出産を表現する「赤血/黒血」が、奄美では腫れ物、沖縄では獲物の断末魔の表現に用いられており、他地域ではあるが「病気」・「怪我」の表現と通じている。体調の変化や苦痛という点で、妊娠はやはり「病気」・「怪我」とは無関係の用例ではないといえよう。

### 3 (3). 疲労

疲労は、とくに「病気」とは異なるテーマのようにも感じられるが、身体の変調という点では関連する事項である。また疲労をめぐる状況はさまざまであり、その状況によって意味合いが異なる症状である。

3 (3) a. 聖なる疲労

沖縄の東村平良の「[ウムイ]」は、ハヤシによる反復部を織り交ぜながら祭祀の様子を簡潔に描写する内容であるが、最後は下のように終わっている。

<u>あんまさぬ</u>	疲れた
へいへい ひるまひるま	へいへい ヒルマヒルマ
<u>あんまさぬ</u>	疲れた
へい	へい

[沖縄(上)・ウムイ394 56・57]

『大成』には歌詞が重複している歌謡として「遊び節」〔沖縄・ウムイ489〕が挙げられており、この用例にも同様の表現がみられる。最後に「疲れた」と結ぶのは、聖域での祭祀で花米を捧げ、鼓にあわせて踊ったことが描写されているので、それらによる肉体的な疲労もあろう。しかしそれ以上に、神に相對したことによる影響であり、精神的な面での疲労である。神の靈力に触れたことで、一般の人間としては感じることもない感情を「疲れた」と表現しているのである。

ピサラシビ くいゆ	ブサラシビ フサ 声を
まーにシビ くいゆ	マーリヤシビ フサ 声を
<u>あしばらぬ んていんきやー</u>	<u>足ばらが満つまで</u>
<u>ピさばらぬ んていんきやー</u>	<u>足ばらが満つまで</u>

(略)

うがんばい とうらシ	立派なお願いをとらす
うがんシき とうらシ	願いすぎる果報をとらす

[宮古・フサ16 155～164]

上は宮古の「前の家元のフサ」の一部である。祭祀の描写の中に「あしばら / ピさばらぬ んていんきやー (足ばらが満つまで)」という表現があり、後注では「足胼胝ができるまで」と解釈されている。直接「疲労」を表してはいないが、「胼胝ができるほど」励んだという表現から、身体面での疲労の意味も含まれると思われる。しかし、この用例も沖縄の東村平良のウムイと同じく、精神面の意味が強いと考えるべきである。神に関わる沖縄のウムイも、右の宮古の用例も、いずれも祭祀を勤める神女のような姿を描写している。祭祀に関わる場合は、労働や気疲れなどとは異なる、神に関する事ゆえの聖なる疲労であり、「はじめに」

でまとめたところの「④信仰上の理由による変調」にもあてはまる。

3 (3) b. 労働による疲労

「疲労」という語の原因として、最も容易に想起されるのは労働であろう。

うでいさぎや	腕下げは
ひじさぎや うらしゅーり	肘下げは下ろしている
<u>やかたがや</u>	胴も
<u>ながにかいん にがばよー</u>	<u>背中もいたくなるまで願えば</u>
ながたじぬ ながしくやー	長旅の海の旅は
うぶゆや とぅな うしくだ	大世は唐までおし下り
チジくだ うはシリ	頂を下り(願いは叶えられて)いる

(略)

シだまだき	数珠玉のように
まだまだき なうらし	真玉のように稔らしてください
びきらたが	男達が
<u>あうくだい でいーきから</u>	<u>荷ない棒のタコができるまで</u>
みがばうぬ	女たちの頭に
<u>かうちばら いでいーきゃ</u>	<u>荷敷き藁の輪のあとができるまで</u>
さらはまぬ	佐良浜の
うふゆば とぅなーまし	大世をそろわしてください

〔宮古・アーク8〕

上の用例は、池間島の「富貴中皿」の一部で、豊作や豊かな暮らしの理想像が歌われている。引用部分の最初は、『大成』の後注によれば祈願の様子であり、それを「痛くなるまで」行う、と表現している。後半4行は、作物の豊作のようすである。この用例には「疲れた」という表現はないが、男女が身体に運搬具の跡がつくほど収穫した農作物がたくさんある、と表現することで、豊作の様子を具体的に表現している。

ばが うんだー田ぬ 稲どうやる	我が親譲り田の米である
ばが 神田田ぬ 米どうやる	我が神田田の米である
苅りばん 苅りばん 苅らるぬ	刈っても刈っても 刈り終えない
持ちばん 持ちばん 持ちやるぬよ	持っても持っても 持てないよ

馬ぬ背ぬ ばぎいるんけん

馬の背が剥げるまで

牛ぬ背ぬ ばぎいるんけん

牛の背が剥げるまで

姉妹頭ぬ ばぎいるんけん

姉妹の頭が剥げるまで

持ちゃばん 持ちゃばん 持ちやるぬよ

持っても持っても 持てないよ

〔八重山・ユングトゥ5〕

上の用例は石垣島のユングトゥであるが、池間島の例と同じく豊作の様子を表現している。これも直接には疲労を表現していないが、牛馬の背の毛皮がはがれ、頭上運搬する女性たちの髪がはげるほど運び続ける必要がある米の大豊作であると表現する。それだけ運搬すれば、労働の結果としての疲労も言外に含まれよう。しかし強調されるのは豊作の喜びである。同様の表現は「種取りあよう」〔八重山・アヨ-21 22・23〕にもみられ、豊作の常套的な表現といえる。

労働によって動作を繰り返すことは、結果として疲労をとともなう。しかし豊作による労働であれば、疲れても、髪が薄くなるなど身体に多少影響しても、喜ばしい出来事となる。ここで引いた豊作による労働の表現は、祈願における健康の表現と同じように、むしろあらまほしい状態として描かれている。

### 3 (3) c. 心労による疲労

いままでみた疲労に関する表現は、神と関わる聖なる疲労や、労働の成果が実るといふ望ましい状態の予祝的な表現であった。しかし、負のイメージで語られる疲労がないわけではない。

七重巻き髪筋の

七重巻の黒髪が

一重巻き成るきヤがめ

一重巻きになるまで

(略)

夜占瀬ゆ越えるんな

ユウラジ 地名 を越える時は

刀刃ゆこえだけ

刀の上を越すようにつらい

外間座ゆこえるんな

外間座を越えるときは

大溝ゆこえだけ

大溝を超えるようである

藍屋川ゆ下りちから

藍屋井を下りる時には

うまの屋ゆ行くだけ

厩に行くようである

〔宮古・アーク55〕

上は「可憐なる鬼虎の娘を歌ひしアヤゴ」の1節で、与那国の鬼虎の娘が宮古に連行され、慣れない労働をさせられる悲哀を表現する部分である。「疲れた」という直接の表現はないが、「髪量が減る」「実際の距離よりもずっと長く感じる」という表現によって、肉体的な疲労と、父親を失ったことや身分の転落などによる悲嘆や精神的な苦痛の両方を表している。この歌謡の主人公である鬼虎の娘は大切に育てられ、もともと労働には不向きであった。妻に迎えるという甘言にのせられて宮古に連れてこられてからは、下女となって、本妻の命令で水くみというきつい労働をさせられる。妻にするという約束が嘘であったという事実や、伝承によると水甕には底がなく、いつまでも水がたまらないという仕打ちを受け<sup>5</sup>、肉体的にも精神的にも追い込まれた状態であった。そうしてやつれきった状態が「七重巻くほどだった黒髪が、一重巻になってしまった」という表現に集約されている。

和歌の影響を受けた琉歌は別として、一般に南島歌謡（古謡）においては、人間の容貌を描写するとき、髪にはあまり関心が払われないが、右の用例では鬼虎の娘のおかれた状況を代弁する表現となっている。

抄括

一般的にいう「病氣」以外の不調として、「事故・怪我」と「妊娠・出産」、「疲労」についてみてきた。「事故・怪我」は、外部からの影響による、身体の見える場所の不調である。願詞において、回避されるべき事態として言及される場合と、呪言での治療の対象となるという点で、表現のしかたは狭義の「病氣」（身体内部に起因する不調）に近い。

「妊娠・出産」は、叙事的な歌謡において表現される例が比較的多い。妊娠した状況や、望まれた妊娠か、望まれていなかったかという事情によっても、表現が大きく異なる。宮古の「磯殿のフサ」では、結果的に男子出生となり喜ばれたのであるが、墮胎をのぞんだり「病み」という「病氣」に関わる表現を用いたり、否定的に表現されている。同じく宮古の「ザウンガニのタービ」では、苦痛や死とつながる「赤血/古血」という表現を用いている。一方、八重山のニガイフチイでは、腹部に注目するとともに「撫で」「守る」といった、新しい生命への愛情を感じさせる表現が並ぶ。

疲労について、「疲れた」というように明確に表現される場合は、実は多くは

ない。しかし、身体を激しく使う場面は、祭祀の場での神への奉仕や、豊作となった米を運ぶ様子など随所にみられ、「病氣」とは異なるものの、神に関わる聖なる疲労感から悲惨な境遇の比喻まで、さまざまな用例において歌謡の場や状況を説明する役割を持っているといえよう。柳田国男は「ひだる神のこと」において、憑依すると突然極度の疲労を覚えさせる神格について言及している。南島歌謡には疲労を起こさせる神格は登場しないが、疲労はときに神に関わる症状ともなりうる。豊作の描写では、肉体的には疲労するような労働の描写によって、豊作の喜びを表現する。

いわゆる「病氣」以外の身体の不調に関する表現は、強調はされないが、じつは歌謡の場の状況を反映した解説である、といえる。

#### 4．身体の不調とその克服 - 病氣治療の呪言

いままでみてきた身体の不調についての用例は、歌謡の内容や叙事的な歌謡の物語展開といった、歌謡の要素のひとつに過ぎなかった。それに対して、3(1)でも触れた病氣治療の呪詞は、歌謡そのものが身体の変調に関するというジャンル、すなわち「はじめに」でまとめたうちの「⑤病氣治療を目的とした歌謡」に相当する。奄美篇の「クチ」、宮古篇の「マジナイゴト」、八重山篇の「ジンムヌ」のほか、「疱瘡歌」は、呪言とは少しく異なるが、病氣の平癒を目的としているという点においては同列に見てもよからう。奄美篇収載のものが用例・種類とも多数であるが、その中で対象とされる症状には、前述のほか、はしか・眼病(ものもらい)・膿疱疹(タンガサ)・下痢止めなどに対する呪言がみられる。

##### 4 (1). 呪文としての病氣治療

神崎宣武氏は『ちちんぶいぶい 「まじない」の民俗』(小学館、1999年)において、病氣癒しのまじないについて以下のように大別されている(同書52～53ページ参照)。

- ①「痛い痛い飛んで行け」のような苦痛を遠くに追い払う呪文。もっとも単純な言語構成
- ②特定のカミを呼んで助けを乞うもの。薬師、梵天などよく知られた神仏の名、あるいは血の道のカミなど単純に名付けたカミを対象に加護を頼む



べることにより、類感呪術的效果を期待しているのであろう。

4 (2). 呪言における身体の不調の描写と対処

不調の原因・治療・以後の快復の過程などを詳しく述べる呪詞もある。心中に念じるだけでなく、言葉による表現や音声という形を与えることで、祈願により力を与えるという目的であろう。症状や治療などを詳しく表現する呪言の内容は、症状(例: 胸病み苦しみ病み、おできや腫れ物〔宮古・マジナイゴト])を明らかにし、快復してほしい状態を述べる(例: やりやすい糞にさせよ〔宮古・マジナイゴト〕、浅ければ上げよ、深ければ落ちよ〔奄美・ニギグチ])という構成をもつ。どれかの要素が欠けたり、簡潔にすまされたりする場合もあるが、おおよそこうした傾向がある。

4 (2) a. 腹痛の治癒の顛末

不調を発症するところから治療・回復過程までを描写した用例として、宮古の「池間のマジナイゴト」を例としてみる。このマジナイゴトは腹痛の治癒を目的とし、腹痛の原因は魚の食べすぎであるが、その前の段階として、船を造って魚を獲りに行く場面から叙述がはじまる。下の引用は、その船に乗って魚をたくさん捕り、暴食する部分である。

まぶゆんみていっじー

チヌマンの魚という群れが

(略)

やふとうりゃー むていーつていー

厄を取り持って

やらび びりゅーむぬぬ

童気狂いは

あていふあいついでいー

余計に食べようとして

あていぬんふつていー

余計に飲もうとして

ふあいくーひー

食べ過ぎて

ぬんくーひー

飲み過ぎて

〔宮古・マジナイゴト〕

上の部分は腹痛の理由を述べている。食べ過ぎ・飲み過ぎの他に「魚が厄を取り持った」という表現が、不調の原因についての考え方を表している。症状は「ばたやん(腹痛み)・「どーやん くるやん(胸病み 苦しみ)」と表現されており、つまり腹部が痛くて苦しいということである。

それに対する対処は、以下のように描写されている。

なうどう んさあいむぬがでいー 何が良いかと思って

(略)

ていんがなシまいんから

天加那志の前から

シーみじぬ ばなひー

白水のハナで

あらいだま たり

洗い玉を混ぜて

ゆふジ たりりばどう

濯いでたらしたら

〔宮古・マジナイゴト〕

『大成』の後注を参照して解釈すると、回復を祈願して供物を供え、霊力のある玉を濯いだ水を身体に垂らしたようである。医学ではなく信仰面にたよった治療である。この祈願により実現されるべき望ましい回復過程は、以下のように述べられている。

ふーんちかい いだしゅー

大きな道に出して

すちすーんちん いだしよー

白い道に出して

あすふすん なしーよー

やりやすい糞にさせよ

ひさふすん なしーよー

うすい糞にさせよ

ふーちざー なりよー

大屁になれよ

だーびん なりよー

大屁になれよ

〔宮古・マジナイゴト〕

有り体にいえば、下痢をおこして悪いものを排出するようという、非常に具体的で実際の描写である。最後に「この言葉は / 返せない言葉であるぞ / 戻されない言葉であるぞ」という呪詞で結んでいる。

このように発症から治療までの一部始終を詳述することは、詳しさの程度に差はあるが、「にぎグチ」や「血止めのタブェ」にもみられる。「にぎグチ」のいくつか〔奄美・オモリ～112、114、116など〕は、磯で魚を獲るところから語りだし、骨を喉にかからせて重要な祭祀に出られないという困惑した状況や、ノ口からもらった水を飲むという対処法、骨が喉から離れる様子が述べられる。先に引用した「血止めのタブェ」〔奄美・オモリ～156〕では、刀で怪我をしたこと、その刀を鍛えた様子までさかのぼって描写されている。

これらの用例からは、南島歌謡の表現者たちが身体に不調を生ずるきっかけか

ら結末までの一部始終をたどることができる。表現の本来の目的は一種の言挙げであり、状況を洗いざらい告白した上で、治療や快復の様子を描写し、実現を祈願するものであろう。描写することによって、言葉が持つ力による治癒を期待するのであるが、さらに考察すれば現在（治療が必要な状態）の症状の悪化を止め、治癒の過程を説明することにより、祈願対象（病気の原因・神や神女のような力を持つ存在など、場合による）に願望を確認するのである。この詳細な描写による言挙げも、呪言の特徴的な形式といえよう。

#### 4 (2) b. 疱瘡歌

疱瘡歌は天然痘をめぐる歌謡である。疱瘡（天然痘）は、沖縄においても日本においても、歴史に登場する流行病の代名詞的存在といえる脅威であった。王府時代の沖縄においては、『球陽』巻10・尚敬王条3年（1715年）の「首里、諸僧をして壇を設け、袂襪して以て痘災を除かしむ」の条が、最初の記録としてあげられる<sup>7</sup>。記事には「那覇、始めて痘を出し、人多く死す。是れに由りて、首里の各邑、諸僧をして、念経談法して、昼夜袂襪せしむ」とある<sup>8</sup>。『球陽』の記事は、他の記事に比べて簡潔な印象をうけるが、人死にが多く、対処として仏教の法力にすぎたことが分かる。

医学的な対処としては、中国や日本の長崎を經由して人痘吹鼻法が用いられ、王府も事業として13年ごとに痘苗を輸入し、小児に人痘吹鼻法による予防を施していたが、それでもたびたびの流行をみた。疱瘡の予防、症状の軽減は、家庭・集落にとっても国にとっても重要な懸案であった。

民俗においては、疱瘡は疫病神である「疱瘡神」によってもたらされると考えられ、その来訪がすなわち罹患であった。可能ならば避け、罹患したとしても症状はできる限り軽微にするべく、疱瘡神を集落に入れないよう、入ってもすぐに退去させるよう「疱瘡神送り」を行い、疱瘡神の機嫌をそこねて重症にならないよう、まつりあげて歓待する習俗があった。

『沖縄大百科事典』の疱瘡関連項目を参照すると、『球陽』にみえるように仏教にすぎるよりも、左縄をかついで集落を練り歩き、疫病神を排除するという沖縄土着の方法や、患者の周りのものを赤ずくめにするという、日本の疱瘡神送りに通じる方法がみられる。比嘉春潮は「翁長旧事談」の中で「天然痘流行のこと」という章をもうけ、明治中期に那覇で天然痘が流行したときの村のようすを詳細

に記している。これによると、村内や家庭内を清潔に保つこと、外部からの来訪者を警戒することなど保健衛生的な方法とともに、札などを提げた数珠玉の首飾りやススキを束ねたものを魔除けとして用いることなど、あらゆる方法が試みられる切迫した状況であったことが分かる。

疱瘡歌の表現のみをみると、しかし、こうした切迫感は表現されない。疱瘡歌は疱瘡神を歓待する、いわばご機嫌取りのための歌謡であり、疱瘡神への讚美に終始する。嘉味田宗栄は「いくら取り出しても変りばえのしない讚めことばの頻出」<sup>9</sup>と表現したが、裏を返せば疱瘡への危機感・忌避をも表しているといえよう。

『大成』収載の疱瘡歌は、『疱瘡歌<sup>和歌</sup><sub>口説</sub>古名歌集文』によるものである。いわば疱瘡というテーマでまとめられた歌集は、「病氣」に関するというカテゴリー以前に、南島歌謡全体からみても特異な例といえる<sup>10</sup>。

歌謡では、疱瘡を直接「疱瘡」という他に、多く「清ら瘡」と表現する。

今度清瘡のかん軽さあすや めこみある御代のしろしさらめ

〔沖縄(下)・疱瘡歌6〕

願たことかなて今度清瘡や 上下ん軽く出る嬉しや

〔沖縄(下)・疱瘡歌9〕

疱瘡歌の表現のうち、「軽い」などの語には病状が軽くすむようにという歌謡の目的があらわれている。「清らさ」「嬉しさ」といった、疱瘡に対する賛美の表現を多用していることは、最大の特徴である。

誠名のことに今度きうらかさや こかねはなのこと二粒三粒

〔沖縄(下)・疱瘡歌66〕

上の用例では、「金花のように」という直喩をもちいて讚美している。「こかねはな(黄金花)」は、古謡では昇る太陽や稲の花について用いられる。疱瘡歌においては、最上の讚辞である喩を用いて、疱瘡神を慰撫しようという心情によるのであろう。

大庫裡ん香しや小座敷ん香ばしや 相良左<sup>ママ</sup> 御宿めしやいさ

〔沖縄(下)・疱瘡歌96〕

右の用例では、香りを讚辞として用いている。『おもろさうし』の「露からど香しや 有る」〔巻14 982〕などが想起されるように、南島歌謡においては美貌や美質、愛情などを表現するとき、香りに触れることがある。右の用例におい

でも、讚美の表現として用いられている。

このように、修辞上は快い表現を使っている、重篤な症状にならないことを願う本心は変わらない。奄美篇には次のような用例がみられる。

きよらしまはち	清ら島に
<u>ほうそうびょうや</u>	<u>疱瘡病は</u>
<u>いれいらんどお</u>	<u>いれないぞー</u>

〔奄美・クチ134 2~4〕

右の用例は、琉歌の疱瘡歌と異なり、疱瘡の締め出しという意図を明確にしている。こうした用例は収載数が少ないが、疱瘡に対する本心がみられる例である。

日本の民俗における蘇民将来の伝説や「疱瘡送り」の行事は、疱瘡を神格化して来訪者としてイメージし、その来訪者に家や集落から退去してもらおうという考え方が明確である。

(略) ゆーとばなすきぬかんや	<u>疫病風邪の神は</u>
くれはら、はしんぐい、またんぐい、	ここから 足越え 股越えをして
しまへ、かいらしよんな、(略)	島へ帰らせなさるな

〔八重山・ニガイフチ6〕

「神」という語彙がはっきりとよみこまれており、各地を巡行することも分かる。来訪神信仰は、八重山のマユンガナシヤアカマタ・クロマタなど枚挙に暇がない民俗における年中行事や、民話などにおいてはよくみられるが、歌謡では例外的である。

疱瘡歌は、疱瘡という一つの明確な疾病をめぐる歌謡であること、琉歌や口説など文字文学の系統の形式であること、内容が疱瘡神への讚辞であることや、疱瘡神を賞賛して退出を願うというまつりあげの思想にもとづいていること、これらが日本の民俗の疱瘡神信仰と繋がることなど、他の身体の不調に関する表現とは異なる、特殊な性格をもつジャンルである。

抄括

南島の呪言における不調の描写は、奄美の「にぎグチ」のように病名や症状を具体的に描写する場合と、4 (1) で引いた「焼けた 焼けた 猿が 焼けた」

のように、症状を抽象的に描写するのみの場合に大別することができる。具体的な描写は、言葉で表現することによって治癒という理想の状態を引き寄せるといふ、健康祈願に通じる方法である。抽象的な呪言の場合は、非日常の言語表現そのものが持つ力によって治癒を期待するのであろう。

呪言のなかでも例外的なのは「痲瘡歌」である。表現上の特色は先述のとおりで、ほかの歌謡・「病氣」ではみられない特徴をもつ。この特色の背景には、王府の関与という歴史的背景がある。しかし、言葉の力によって「病氣」を退けようとする思想は、「痲瘡歌」にもほかの呪言にも共通する。

## まとめ 身体の不調に関する表現の目的と特徴

以上でみてきた用例をもとに、南島歌謡における身体の変調の状況をまとめてみよう。

まず、歌謡において身体の変調が表現される状況をみてみる。南島歌謡を俯瞰すると、「集落や個人の安寧を祈願する祝詞において」・「病氣治癒の呪詞」・「叙事的な歌謡における物語展開の要素として」の3つに大別することができる。

沖繩のオタカベや八重山のニガイフチのような祈願の詞章においては、望ましい状況として「健康」があげられ、描写される。これが身体に関する表現の本来的な姿である。この場合、健康は「胴強く／身強く」、「足高く／爪高く」のように「身体の部分の意味する語彙＋形容詞」という形式をとる場合が多い。身体の不調（「病氣」）は、そうしたあらまほしい状況からはずれる場合がないようにという文脈において表現される。そのため、「健康」ほど積極的に表現されないし、形式も「健康」の場合のように整ってはいない。

同じ願詞のなかにあっても、表現の方法においては、「健康」と「病氣」は対をなしていないといえる。言葉に霊力をみとめる古謡においては、望ましくない状況は積極的には表現されないことが一因であろう。別のいい方をすれば、「健康」はひとつのテーマであるが、病氣や不調は忌避される状態ゆえに、テーマとしての地位が確立できていない。表現の形式が成立するほど触れられず、「健康ではない状況」として終わってしまうからである。

祝詞における身体の変調に関する表現の特徴としては、身体の一部の語彙をもって身体全体を意味する場合が多いことがあげられる。「どう（胴）」・「み

(身)」「きも(心・精神)」のほか、腰と足(「足/爪」の対語)に関する用例が多い。この点について、「病氣」や身体の変調から視野を転じると、例えば美貌を表すときの「目眉清ら/齒口清ら」のように、南島歌謡には身体の一部に注目する表現が多い。表現の形式としては、身体的一部分=身体全体という、同様の発想によるものであろう。これについては、「不調」「美貌」というテーマをまとめて俯瞰し、身体に関する表現という大きな視点を設定して、改めて考察する必要がある。今後の課題としたい。

もうひとつ表現の特徴をあげると、身体の変調については、比喩や美称などの修辞があまり用いられない傾向がある。病氣治療の呪詞の場合は、不調の状態から元の(=あらまほしい)状態に戻すため、順を追って正確な描写がなされる。4 (2)の「腹痛の治癒の顛末」でみたように、腹痛であれば、原因を究明して、儀式を行うことにより治療とし、下痢によって原因となった食物を排出することを予祝的に述べる。また、虫さされの場合は、腫れがひくようにとという意味で「平たくなれ」〔奄美・オモリ～154〕、といった具合である。

叙事的な歌謡の場合にも、表現が形式的であっても比喩表現などの修辞が用いられる場合は少ない。例えば、出産の場合の「赤血/古血を垂らしながら」という描写は、対語を用いた常套表現ではあるが、血の表現は具体的でもある。漁労の獲物としての魚の様子を「赤血ガラガラ/黒血ブクブク」〔奄美・オモリ～296 114～118〕とする表現などは、形式的というよりも写生を感じさせる。

ただし、これら血に関する用例は、死の直前を表現している。右のオモリが獲物としての魚であることから例示できよう。死との距離は、呪言に登場する症状とはほど遠く、健康祈願の対極にある。そういった意味で、血に関する表現は、不調に関するもののなかでも特殊である。

疱瘡歌の場合は例外的に、「清ら」「香しや」といった讃辞が用いられ、瘡を「金花」という比喩で表現することもある。軽度の症状ですむことを「三粒」という発疹の数で表現している点は、数による形式的な表現ではあるが、発疹を表現する点は写生的である。

疱瘡歌は、琉歌が中心という文字文学の形式、ひとつの病気をめぐる歌謡としてジャンルを築いている点など、他の不調の表現とは性格を異にする。疱瘡と他の「病氣」との違いは、先述のように、予防や流行に王府の政策が直接として関

わっていたという歴史的な背景である。疱瘡歌の形式や表現は、この為政者との関わりに由来するものである。治療を目的とした歌謡である点では、奄美のタブエヤ八重山のジヌムヌと共通するが、巡行する・芸能好きなどといった疫病神の性格を明確に設定し、「こがね」・「清ら」・「香しや」などの美称辞や、「軽さ」などの理想的な状態を並べて、まつりあげることで治療を得ようとするという性格そのものが決定的な差異といえよう。

南島歌謡の、とくに信仰に関わる歌謡にとって、身体の不調は、健康という目標を達成するための過程のひとつという面がある。よって、おもてだって表現を忌避するわけではないが、目立った修辞や形式が確立されないのではないだろうか。

ただし、だからといって身体の不調はテーマとして成り立たないというわけではない。呪言によって症状をコントロールしようと試みられているし、妊娠・疲労といった「病気」とはいえない症状をふくめ、「病気」は人間が避けて通ることができないテーマである。身体という語彙のカテゴリーには、美の表現、人間と動物との違いなど、関連するテーマが多い。これらと変調の表現をどのように整理するかという点を今後の課題とし、より広い視野から身体の表現を分析したい。

註 文献情報は、参考文献一覧に示したものについては〔著者名：出版年〕で示した。再販の文献については、「再版〔初版〕年」の形で示した。

- 1 テキストとしては『南島歌謡大成』を用い、文中の用例の引用部分には〔地域・歌謡ジャンル名 歌謡番号 節番号〕という形式で、改行して末尾に典を示した。歌謡ジャンルの名称、分類、訳は、原則として『大成』に従った。語義の解釈には『沖縄古語大辞典』、『沖縄語辞典』などの辞典を参照した。
- 2 [波照間永吉：1999年]に収載
- 3 王府時代の出来事として、病気以外の事項としては、1609年の島津侵攻や、1624年の八重山キリシタン事件は、もとはといえば船が運んだ兵士やキリスト教によって起こっている。船が病気を媒介することも、現実には世界史のいたるところで起きている。ハンセン病、ペスト、梅毒、天然痘などは、いずれも人間の移動によってもたらされ、時代の人口を大きく減少させた。天然痘については、4 (2) bの「疱瘡歌」の項で改めて述べる。
- 4 「シバナシンゴ」に関しては〔山下欣一：1979年〕316～317ページを参考

にした。

5 [新里幸昭：2003年] 179～183ページを参照した。

6 [山里純一：1997年]を参照

7 疱瘡歌については、以下の資料を参照した。

『南島歌謡大成』沖縄篇下の解説「疱瘡歌」項（485～490ページ）

沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』中・下巻、1983年（中巻「天然痘」項、  
下巻「疱瘡歌」・「『疱瘡歌』」・「疱瘡神」・「疱瘡神迎え」項）

[比嘉：1971年]（収載）

8 780項・255ページ。球陽研究会[編]『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成  
5、角川書店、1978〔1974〕年

9 [嘉味田宗栄：1979年] 396ページ

10 歌集そのものについては[池宮正治：1976年]および『大成』沖縄篇下の解  
説にまかせ、ここでは「病氣」に関する歌謡という点から、表現のみに注目す  
る。

また、疱瘡歌については、[池宮正治：1976年]、[嘉味田宗栄：1968年、  
1979年]を参照した。

#### テキスト・参考文献

外間守善・総編集『南島歌謡大成』全5巻、角川書店・1978～1980年

沖縄古語大辞典編集委員会・編『沖縄古語大辞典』角川書店・1995年

国立国語研究所・編『沖縄語辞典』大蔵省印刷局・1991年

波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房、1999年

山里順一『沖縄の魔除けとまじない』南島文化叢書18、第一書房、1997年

池宮正治「『疱瘡歌』解説と本文」（収載：『琉球大学法文学部紀要 国文学・  
哲学論集 第20号』1976年）

比嘉春潮「翁長旧事談」（収載：『比嘉春潮全集 第三巻 文化・民俗篇』沖  
縄タイムス社、1971年）

嘉味田宗栄『琉球文学発想論』星印刷、1968年

嘉味田宗栄『琉球文学序説』至言社、1979年

内田順子『宮古島狩俣の神歌 その継承と創成』思文閣出版、2000年

新里幸昭『宮古の歌謡 付・宮古歌謡語辞典』沖縄タイムス社、2003年

山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局、1979年

波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書491、朝日新聞社、2002 [ 1994 ] 年

池田光穂・奥野克己 共編『医療人類学のレッスン 病をめぐる文化を探る』  
学陽書房、2007年